

第三十八回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

## 渡名喜 庸哲 著『レヴィナスのユダヤ性』

(2025年2月20日刊 勁草書房)

渡名喜 庸哲 (となき・ようてつ)

立教大学文学部教授

1980年(昭和55年)3月20日生まれ 45歳 福島県福島市出身

専門は、フランス哲学、社会思想史

2002年3月、一橋大学社会学部、卒業。2004年3月、東京大学大学院総合文化研究科修士課程、修了。2006年9月、カーン大学大学院人間学研究科哲学専攻修士課程、修了。2009年3月、東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻、博士課程単位取得退学。2010年3月、日本学術振興会特別研究員(PD)(~2012年3月)。2011年3月、パリ第7大学大学院社会科学研究科博士課程、修了。博士(政治哲学)取得。2012年4月、東洋大学国際哲学研究センター、研究助手(~2014年3月)。2014年4月、慶應義塾大学商学部、専任講師。のちに、准教授(2016年)。2020年4月、立教大学文学部、准教授。2022年5月、単著『レヴィナスの企て：『全体性と無限』と「人間」の多層性』(勁草書房、2021年)で表象文化論学会賞を受賞。2023年4月、立教大学文学部、教授(現在に至る)。

単著に『レヴィナスの企て：『全体性と無限』と「人間」の多層性』(勁草書房、2021年)、『現代フランス哲学』(ちくま新書、2023年)、『レヴィナス：顔の向こうに』(青土社、2024年)、共編著に『カタストロフからの哲学：ジャン＝ピエール・デュピュイをめぐって』(以文社、2015年)、『終わりなきデリダ：ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』(法政大学出版局、2016年)、『個と普遍：レヴィナス哲学の新たな広がり』(法政大学出版局、2022年)、*Levinas et Merleau-Ponty. Le corps et le monde* (Hermann, 2023)、翻訳書に、ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で：破局・技術・民主主義』(以文社、2012年)、エマニュエル・レヴィナス『レヴィナス著作集』(全3巻、法政大学出版局、2014-18年)、ジャック・デリダ『最後のユダヤ人』(未来社、2016年)、サロモン・マルカ『評伝レヴィナス：生と痕跡』(慶應義塾大学出版会、2016年)、グレゴワール・シャマユール『ドローンの哲学——遠隔テクノロジーと〈無人化〉する戦争』(明石書店、2018年)ほかがある。

### 受賞のことば

この度は、栄ある和辻哲郎文化賞をいただくことができ、大変光栄に思っています。本書が扱うエマニュエル・レヴィナスという哲学者は1906年生まれで、和辻とは一回り以上も離れ面識はありませんが接点があります。和辻と同じ1920年代にレヴィナスもドイツに留学しハイデガーに師事します。和辻が『風土』をはじめ西洋思想の枠に収まらない日本性を意識したのに対し、レヴィナスは自らの出自の「ユダヤ性」にこだわりました。私自身は西洋思想をメインに研究をしていますが、この問題が気が

かりでした。長年のその研究をまとめたのが本書です。一般受けしにくい主題ですが、このたび望外の評価をいただき、後押しをいただいた気持ちでおります。20 世紀のユダヤ人の経験をめぐる問題は、はからずも現在の世界情勢のなかで再び注目されてきています。哲学研究が混迷する現代社会を理解する一助となればとの思いを新たにすの次第です。

## 《選考委員評》

---

清水 正之

現代の社会の分断と対立。身近なことから世界情勢に至るまで、私たち一人ひとりに深く関わりがある事象である。私たちは、ばらばらなままでよいのか、ばらばらの状態を束ねるものはあるのか、ないのか。すなわち、私たちは「普遍と特殊はいかに結びうるのか」という根本的問いに向き合っている。今年度の最終選考作はいずれもこの問いに、真摯に応答を試みているという感想をもった。

その中で、今回の受賞作渡名喜庸哲氏の『レヴィナスのユダヤ性』は、ユダヤ人哲学者レヴィナスを対象として、その「ユダヤ性」に焦点を当てる。レヴィナスは、リトアニア生まれのユダヤ人で、フランスに移住、その間家族を殺され、本人もフランスの兵士として収容所生活を経験している。その出自、またパリでユダヤ人の学校での教職にあったことなど、レヴィナスは過酷な歴史的経験とユダヤ的伝統の只中に生きつつ、ユダヤ的なものをヨーロッパ的普遍へと開く「普遍主義的特殊主義」の立場をとり、ユダヤ教を倫理として理解した。

ユダヤ人の学校ではタルムードを、その立場から読み解く姿勢を維持している。政治的なシオニズムには、一定の距離を置いてきた。もちろん彼を取り囲む社会的環境は変化し続ける。シモーヌ・ヴェイユ等とのキリスト教との関わりや距離にも変化はあるし、ユダヤ民族以外の存在への眼差しもまた変化する。著者はそのレヴィナスの変容を丁寧に追ひ、またレヴィナスに加えられた批判についても丁寧に論じている。

レヴィナスは、絶対的な他性をもって立ち現れる他者のすべてを説明しようとする全体性を引き裂くこととなるという。他性のよびかけに応える責任から主体性を説くレヴィナスに対して、＜自分に呼びかけられたのではないのに応答する＞聞き間違いの可能性を指摘するデリダを論じた最終章など、普遍性と他性の緊張関係を浮き彫りにする点で示唆的である。

## 野家 啓一

レヴィナスの哲学を論ずるのにユダヤ教やユダヤ思想・文化との密接な関わりを避けて通るわけにはいかない。だが私を含む日本の通常の読者にとって、この「ユダヤ性」なるものの内実には馴染みがなく、容易なことでは近づくことができない。渡名喜庸哲氏の受賞作『レヴィナスのユダヤ性』は、リトアニアに生を享け、のちにフランスに渡り、「東方イスラエリット（フランスに同化したユダヤ人を指す）師範学校」の校長としてユダヤ人教育に携わった彼の経歴をたどりながら、レヴィナスのユダヤ思想関係のテキストを細大漏らさず読み解き、彼の哲学の本質を「普遍主義的特殊主義」と特徴づけて解明しようと試みた、文字通りの労作である。

ここで普遍主義とは西洋（特にフランス）の合理主義的伝統を指し、特殊主義とはユダヤ教の伝統を掘り起こし現代に蘇らせることにほかならない。レヴィナスの企図は、これら二つの伝統を分裂ではなく連結として示すところにある。その核心は第二部『困難な自由』および第三部『タルムード（モーセの律法に対する注釈）講話』の読解を通じて展開される。キリスト教が内面性に依拠するのに対し、ユダヤ教は現世における「倫理的活動」を重視するのである。そのことは「ライシテ（政教分離）」をめぐるレヴィナスの見解にも表れている。彼によれば、ライシテの考えにはユダヤ的源泉が存する。そのためには道德意識（倫理）としての宗教と社会的現実（教会）としての宗教を区別する必要がある。道德意識とは人間の人間に対する責任のことである。

第四部ではユダヤ人と非ユダヤ人との「共生」もしくは「共棲」という困難な課題が取り上げられる。ここではジュディス・バトラーによるレヴィナス批判が鋭い。すなわちレヴィナスにおける「他者の不在」とヨーロッパ中心主義を剔抉して、彼の視野にはアジア・アフリカの人々が欠落しているというのである。いずれにせよ、こうした指摘を踏まえながら、著者による今後のレヴィナス論の深化を期待したい。

本書を貫いて通奏低音のごとく響いているのは、「アウシュヴィッツの後」と「第三次中東戦争」それに「六八年五月」の異議申し立て運動などに象徴される＜二〇世紀の経験＞である。それらの複雑な政治状況を背景に、これまで「顔の倫理」のみが焦点化されてきた感のあるレヴィナス哲学に対し、「ユダヤ性」という切り口から新生面を拓いた優れた作品が得られたことを喜びたい。なお、巻末にユダヤ思想に関する簡単なグロッサリーでもあれば、私のような素人読者にも理解の一助になったものと惜しまれる。

## 関根 清三

選考委員を拝命してから幾星霜、しかし今年度ほど選考に悩んだことはありませんでした。それは、今回の候補作が何れも長短相半ばして、一頭地を抜く作品がなかったからでもありましたが、見方を

かえれば、それだけ拮抗した実力作が揃っていて、取捨選択するに忍びなかったということにもなりましょう。そして考えてみれば何事にも長所短所は付きもので、大事なことは、その長所が短所を圧倒して輝いているということなのかも知れません。

渡名喜庸哲氏の受賞作『レヴィナスのユダヤ性』は、主著『全体性と無限』、更には『存在するとは別の仕方』以降に顕著となる、「顔の倫理」「無限への応答」「他者への応答責任」といったレヴィナス哲学の諸テーマが、ギリシア哲学から受け継がれた概念枠組みだけで理解されうるものではないことを剔抉します。むしろ前後して物された『困難な自由』、更には後の『タルムード講話』などユダヤ的思索、就中ラビ文献やタルムード的読解の構造を参照することによって初めて、その内在的論理が明らかになることを周到に論じます。そうした研究として、我が国のレヴィナス研究史上に光り輝く業績であると思います（カトリーヌ・シャリエ『無限者の痕跡 エマニュエル・レヴィナスとヘブライ的源泉』が、佐藤香織氏の手によってほぼ時を接して翻訳され、日本語でも参照できるようになりましたが）。確かに選者のように旧約聖書を専門とする読者からは、タルムード経由のレヴィナス、さらには同時代の対話相手として取り上げられるデリダ等の、旧約テキスト解釈がどこまで説得力を有するのか、著者ご自身の更なる問い進みによって、レヴィナス哲学の現代的射程をめぐる批判的吟味を期待したくもなりましょうが、ひょっとするとそれは、望蜀の嘆の類いで、むしろ足るを知るべきなのかも知れません。

その他、明治期東アジア哲学における「批評」概念を検討した郭馳洋氏、理性や道徳に対する内在的な問いかけとしての「批判」を人類学に適用することで、現代社会における「つながり」の再構築を試みる久保明教氏、エピクロス主義の「逸れ」と近代政治哲学の関連を問うた中金聡氏らの力作が並ぶ候補作の中で、私は特に末木文美士氏の『靈性の日本思想 境界を越えて結びあう』に惹き込まれました。本書は、仏教や神道といった伝統宗教のみならず、民間信仰や近代思想にも目を向け、靈性の多様な表現を日本思想史に広汎に拾い上げて論じています。その過程で、単なる宗教論にとどまらず、人間存在の根源的な問いや、現代社会における孤立・断絶の問題、更には戦後の憲法制定や社会変容にまで議論を広げ、読者に多様な思索を促します。ただ著者ご自身、認めておられるとおり、「エッセー」的な叙述を旨としており、「学術」的な彫琢はこれからの課題だとすると、本作を学術部門の受賞作に選んでは、氏は片腹痛いと苦笑されるかと躊躇われました。ここでのスケッチが大伽藍として完成する日を鶴首して俟つ希望を最後に申し述べて、今年度の多彩な作品群へのオマージュの結びとしたいと思います。